鈴木藏 (1934-)

鈴木藏は、志野派陶芸を代表する陶芸家だ。1994年には人間国宝に認定され、志野の普及に努めている。

近隣の土岐市に生まれた鈴木は、その地で釉薬の専門家である父に師事し、作陶と釉薬の技術を学んだ。特に特に志野に興味を持ち、20代からその制作を始めた。その後、日本伝統工芸展に入選するなど、数々の賞を受賞している。1964年に仕事のために多治見にやって来て、その2年後に自分の窯を設立し、現在も精力的に新作を発表している。

鈴木作品は、志野の伝統的な製法や美意識を踏襲しながらも、現代的な感覚で制作されている。ここに展示されている茶碗は、彼が得意とする緋色の土と白い長石の釉薬のコントラストを大胆に表現している。ろくろで成形した後、ヘラを使って側面を成形し、独特の歪んだ凹凸のあるフォルムを作り出している。

鈴木作品の作風は伝統的でありながらも、現代的な技術も取り入れている。1960年代からは、より高度な管理と安定した焼成を実現するために、薪窯ではなくガス窯を使用している。伝統的な志野の技法をガス窯に適応させるために、彼は粘土や釉薬のテストを重ね、窯の調整を行った。